オビラメの会のイトウ再導入実験河川に現れた無標識親魚。アブラビレをはっきり確認できる。2019年5月5日、撮影・山根敏夫。

再導入第2世代野生魚を初確認

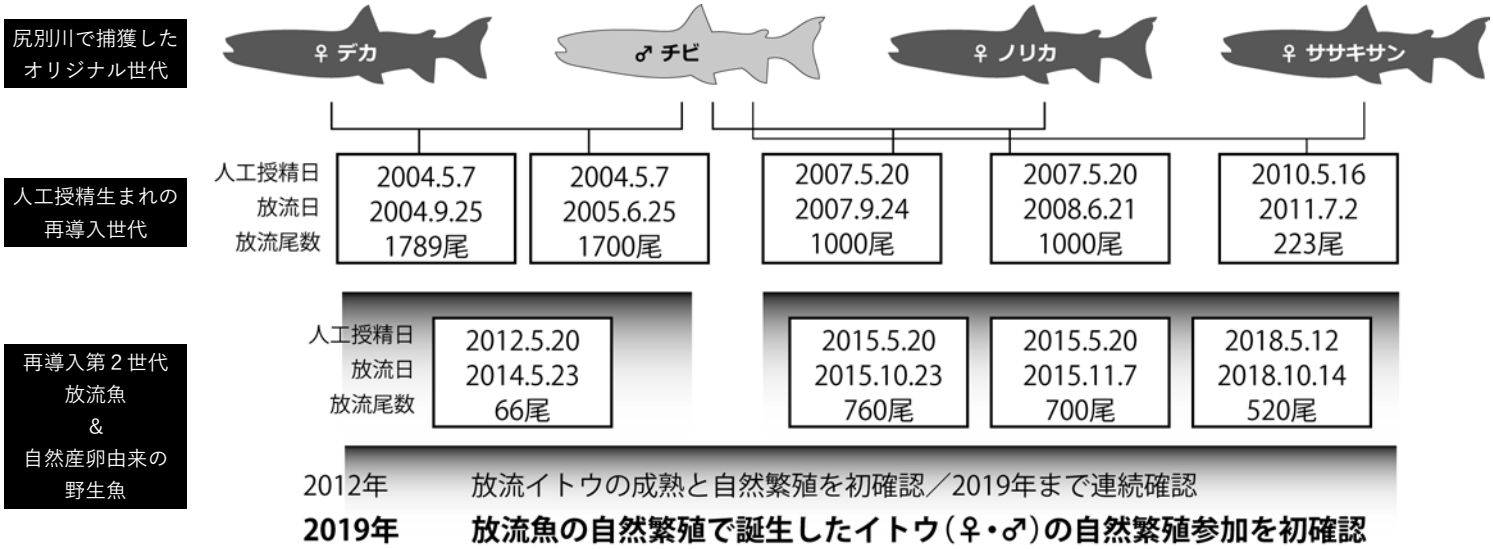
山根敏夫　オビラメの会

オビラメの会によるイトウ稚魚放流が行なわれている倶登山川水系で、4月29日から5月10日まで、モニタリング調査を実施しました。その結果、従来の標識魚だけでなく、初めて「標識のない魚」を確認することができました。

「標識のない魚」とは、われわれの放流魚ではない、ようは「自然産卵で生まれた魚」です。この川で再導入実験を開始したのは2004年で、その放流稚魚たちが成長して親になる年齢にさしかかった2012年以降、このエリアでは標識つきの親魚たちの繁殖遡上と自然産卵が確認されるようになっています。その自然産卵で生まれた子どもたちが順調に生き延びていれば、一番早く12年に生まれた魚たちが今年7歳になりますから、そろそろ親魚になって繁殖に参加し始めるのでは、と期待されていました。その予測通りに「標識のない魚」を見つけることができました。

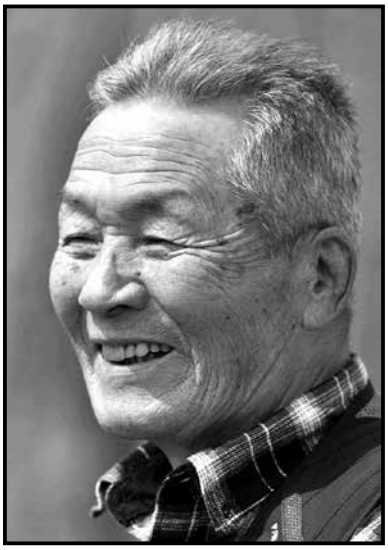
前年までと比べると、今季は遡上数が多かっただけでなく、初めて無標識の「再導入第2世代野生魚」の雌雄を確認できました。非常に良かったと思います。

（p13に関連記事）



巨星、墜つ

草島清作オビラメの会会長が5月16日朝、蘭越町内の入院先の病院で逝去されました。89歳でした。昭和時代に尻別川で花開いたイトウ釣り文化のパイオニアであり、平成時代はオビラメの会を率いてイトウ尻別川個体群の復元に全力で取り組んでこられました。ご冥福をお祈りするとともに、レジェンドの業績を讃えて、オビラメ会報創刊号～４号への寄稿を採録します。



ありし日の草島清作会長。撮影・足立聡。

尻別川釣士のイトウ雑学

草島清作　尻別川の未来を考えるオビラメの会 会長

北海道南部、羊蹄山麓を巻き込むようにして流れる道南最大の川「尻別川」。この川を象徴するのはやはり、魚類の頂点に位置するイトウであろう。このイトウの生態については、あるていど研究されてきてはいるが、未だに未解明な部分があることは否めない事実である。そこで、過去数十年に亘る釣りの実績と経験に基づき、私の考えをご披露したい。この尻別川のイトウの自然の生態についての、いわば「尻別川イトウ釣士」の目から見た現場におけるイトウ雑学である。

繁殖について

イトウは学術的にはサケ科魚類で、「イトウ属」に分類されている。しかし、サケ科ではあっても、サケやサクラマスなどのような「産卵後の斃死」はない。数年にわたって産卵を繰り返すのである。この点、ほかのサケ科魚類とは一線を画している。尻別川の場合、イトウの雌は生後５年くらいで成熟するのではないか、と思われる。雄は５年から６年で成熟すると思う。

数年にわたって産卵を繰り返す、といっても、雌は毎年抱卵するわけでない。３年か４年に一度、産卵するのではないかと思われる。

養殖のイトウならば〝食料事情〟が良いので、毎年の抱卵も可能かと思うが、自然の中での食餌事情は決して良くはないと思える。したがって、河川に自然に生息するイトウについては、産卵も養殖イトウのように頻繁にはいかないと思えるのだ。学術的な研究は主に養殖魚で行なわれている。自然生息の野生のイトウとは異なるのである。

雌雄判別について

イトウの雌雄判別は難しい。産卵期であれば、雄は体側が赤みを帯びるので（いわゆる婚姻色）この時期の判別は容易ではあるが、それ以外の時期は困難だ。あえて言うと、雄は全体に大柄で、ごつい感じがする。雌は全体が丸みを帯びて優しい感じがするのであるが、なかなか判別は難しい。

呼び名について

北海道先住民族であるアイヌの言葉で、イトウは「チライ」「オピライメ」「トシリ」などと呼ばれている。これら呼び名は、土地によって異なる方言なのか、それとも魚の種類（タイプ）によって違った名前をつけられていたのか、判断は難しい。

かつてアイヌの人たちにとって、イトウは食料、また衣

服や履き物の素材として、切っても切れない縁の魚だったろうことは、伝承などから伺い知ることができる。

私は少年時代からイトウを釣りはじめ、釣った魚は必ず食べたものだったが、その身は甚だ美味である。ただし、味は捕獲時期によって異なる。秋10月、水温が極端に下がるこのころになると、脂ののった「美味い」イトウが捕れる。味に関していえば、この時期から、翌年融雪期を迎える3月までがこの魚の旬である。この時期のイトウの食味は、マグロのトロどころではない珍味だ。

イトウの皮はサケの皮より数段丈夫で、かつてアイヌの人たちは、この皮を利用して衣服や履き物を作っていた。

イトウの呼び名に話を戻すと、これほど生活に密着した魚だったからこそ、アイヌの人たちはいろいろな名前で呼び分けたのだろうと思う。方言もあったかもしれない。しかし私は、かの狩猟採集の民には、魚の姿形の微妙な違いを一目で区別する鋭い観察眼が備わっていて、そうやって区別したそれぞれに名を与えたのだ、と考えたい。

その根拠はこうである。

尻別川のイトウを、アイヌの人たちはかつて「オビラメ」と呼んでいた、と私は聞いている。そうして、尻別川のイトウは、他の水系のイトウとは形態が大きく異なると私には思えるのだ。

他の河川のイトウと比べてみると、尻別川のイトウははるかに太く、巨大なのである。同じ長さのイトウの体重を比べれば一目瞭然、1.3 ～ 1.4倍も太っているのだ。

イトウは日本産淡水魚の中で最も大型化する魚で、2m以上に成長するともいわれている。私の釣り人生では、そこまで巨大化したものには残念ながらお目にかかったことはないが、尻別川で目撃した最大は1.7mくらい。釣り上げたものの最大は四尺七寸五分（1.57m）である。当時の釣り具で仕留めるにはこれが限界のサイズでなかったかなと考えているのだが、もしその時代、現在のように釣り具が発達していたならば、2mのイトウも夢ではなかったものと思っている。

さて、イトウがここまで巨大化できるのは、川から海に下る「降海性」を有するが故、というのが私の考えである。だが、川から出ても、せいぜい汽水域（川水と海水の混じり合った水域）までで、真海水域までは出ないのではないか。それを証明できるものはないが、「イトウが海岸近くの網にかかることは稀にあるが、沖の網にはかかったことがない」と漁師に聞いたことがある。

さて尻別川は日本海に流れ込んでいる。北海道の日本海沿岸は、岸辺近くからドン深となっている。そのため汽水域は非常に狭い。したがって、降海したイトウは河口からそれほど遠くまでは行けないのではないか。尻別川の近くでイトウの生息河川といえば石狩川だが、降海したイトウたちは上のような理由でお互いに河口から離れられず、魚同士の交流はなかったと思われる。

それにひきかえ道北、道東の海は岸辺からはるか沖に至るまで浅海である。汽水域も沖合まで広がっているものと考えられる。汽水域が広ければ、各河川から降海してきたイトウにすれば、生まれた川とは別の新しい河川へ向かうなど、交流は容易であろう。

こうしたことを考えあわせると、尻別川のイトウについては、古くからよその河川の群れと交流することのないまま、独自に進化してきたと思われるのだ。尻別川のイトウが、太くて巨大である理由はここにある、と私は考えている。そうして、アイヌ民族は尻別川のイトウを特別に「オビラメ」と呼び分けていたに違いないと私が考える、その理由も同じである。

とはいえこれはあくまで私の推論に過ぎない。このさき、遺伝子分析などが行なわれれば、こうした謎も解明されていくだろう。

イトウは浮気者？

今までの釣り人生の中で、イトウの産卵を見たのは2度や3度ではない。

尻別川のイトウの産卵期は、4月下旬から5月上旬である。融雪期を過ぎて山の雪がほぼ消えかかったころから、逆に減水期にさしかかるそのわずかな期間に産卵を済ますのである。

イトウは産卵のため、支流のはるか上流までさかのぼり、川底が水通しのよい礫層になっていて、砂利の粒がかなりそろった場所を選ぶようである。

しかしそのような場所は、かつての尻別川のような原始河川でなら簡単に見つけだすことが出来ようが、現在のような「人工河川」では、ほとんど望めない。支流は必ずといっていいほど砂防堰堤でせき止められている。しかも魚道もない。こんな状況の今日、尻別川の支流では100%、イトウの産卵など見ることができないであろう。

従って、尻別川のイトウはいま、本流での産卵を余儀なくされているのだが、その本流でも毎年毎年、河川改修が繰り返されている。

タイミングの悪いことに、増水期から減水期に移るころ、前年度に施工された農用地工事、河川工事などによって痛めつけられた土地から、泥水が一気に川に流れ込むのである。泥水には「シルト」が多量に含まれている。せっかく産みつけられた卵にこのシルトが付着すると、死卵になってしまう。シルトはさらに、イトウ稚魚の餌となる水棲昆

虫（トビケラ、カゲロウ類）をも死滅させてしまっている。

人間は、人間以外の動植物のいのちをなぜ軽視してしまうのか。少しばかりの便利さを追求するために、動植物のいのちなどものの数ではない、という考え方。地球上の動物たちの頂点に位置するのだと自負するのならば、もう少し生き物たちへの思いやりを持つべきではないのか。

公共事業の河川改修ひとつとっても、ろくすっぽ環境調査もせず、やたらと破壊を繰り返すばかり。あとは野となれ山となれ、とでもいわんばかりである。

河川環境も地球環境も何も分からないような役人たちが設計するのだから、環境保護や自然との共生など、ほど遠い話かも知れない。川の石１つ、河原の木１本動かすことによって、回りにどれだけ影響が及ぶか、周囲にどのような変化を与えるか。まるで分かっていない。

行政職員たちは皆一様に公務員試験をパスして、それぞれの地位についているとは思うが、せめて河川に携わる役人には、工学だけでなく環境学もしっかり学んできてほしい。

もちろん役人たちの中にも、環境保護を考えない河川行政のやり方を「否」と考えている人たちも大勢いると思う。しかし、もしその考え方を声を大きくして論ずれば、たちまち役所の中で居場所を失ってしまうのではないか。自分の将来を考えて、その声も飲み込んでしまうより仕方ないのであろう。間違いを間違いといえない雰囲気が、現代の日本の官僚制度にはあると思う。しかし、それは改革していかなければならない。

どうも脇道にそれた。話を本筋に戻そう。尻別川がまだ原始河川の姿を保っていた時代、本来的な産卵環境である支流上流部で私が観察したイトウ産卵の様子である。

放卵を済ませた雌は、産みつけたばかりの産卵床に、尾びれを使って器用に砂利をかける。と間もなく、流れをさらにさかのぼって姿が見えなくなった。

少ししてから後を追って歩を進め、100 mほどのぼると、先ほどの個体と思われる雌が、盛んに尾びれで砂利をはね除いている。イトウは一どきに何回かに分けて卵を産むのである。

ところが、である。そのそばには、雄が並んで、盛んに体を振るわせているのだが、その雄がどうも、さきほどペアを組んでいたのとは明らかに違う個体なのだ。

不審に思って見直したが、やはり雌は先ほどの個体、雄は違う個体……。

こういうケースを私は何度も目撃している。

そうして独断ではあるが、こんな結論に達したのだ。「イトウとは浮気な魚である」。

イトウの住処

産卵前のイトウは一定の場所に定着する。それも必ずといっていいほど、つがいで棲んでいるのだ。古くから、大物を１匹釣り上げたら、そこには必ずもう１匹いる、と言われてきた。最近まで、といっても 20 年ほど前までだが、尻別川でも同じことが言えた。

イトウにとっては、簡単に餌のとれる場所が、すなわち「住処として優れた場所」なのである。川の中で、最も餌のとりやすいような場所には、必ず大物のつがいがいた。２番目にとりやすい場所には、それより少し小さめのつがい。以降順に３番目、４番目と、大きくて強い魚のつがいほど、有利な場所を「住処」として利用していたようだ。

そうして、２番手、３番手のイトウたちはいつも「１番の住処」を狙って手ぐすねを引いている。「１番の住処」でイトウを釣り上げると、４～５日もすれば別のイトウのつがいが入ってくる。だから、一度そんなポイントをつかめば、同じ場所で短期間に多くのイトウを釣り上げることが出来た（しかも大物から順に）のである。

2012年3月17日、倶知安風土館主催の町民講座「オビラメ学／第４回「尻別イトウと地域文化」」で講師を務める草島清作会長。撮影・平田剛士。

好物はドジョウ

イトウはヘビやネズミまで食べる、という説が流布しているが、私の釣り上げたイトウの腹にそのようなものが入っていたことは一度もない。いわれているような悪食は、事実だとしても、イトウが川に溢れんばかりにいた時代のことであろう。

たしかにイトウは生きた餌を好む。胃の中を見ると、ウグイ、ドジョウ、スナヤツメを好んで食していることが分かる。ドジョウやスナヤツメは特に好物である。

従って釣りにも生き餌を使うのが鉄則で、生き餌であれば、釣りバリが多少はみ出していようと、猛然と食いついてくる。

かつてイトウは、サケやマスを食害する害魚として扱われていたのだが、実際には、アユなども含め、そうした魚は食べない。というか、素早い動きのものは捕まえられないのが本当である。

弱点はストレス

釣ったイトウを生かしたまま持ち帰って飼おうとしても、なかなか長生きさせることが出来ない。イトウはストレスに極端に弱いようなのだ。とりわけ雌が弱い。同じ環境で飼っても、先に死亡するのは雌である。比較的飼いやすいのは 50cm 前後の雄だ。

最後に

以上申し述べたのは、イトウ釣士としてのイトウ雑学であり、研究者とは考え方も、またイトウの見方も違いのあるのは当然と思う。だが、このことはぜひ強調しておきたい。私がイトウ釣りにのめり込んだ時代のように、川のいたるところにイトウが躍動しているような、そんな尻別川をもう一度、見たい――その思いだ。

もちろん、イトウは「尻別川のイトウ」でなければならない。他の河川の個体を採捕・採卵して養殖した魚を尻別川に放流すればこと足りる、と考える人もいるかも知れないが、私は「尻別川で育まれたイトウの遺伝子」をあくまでも尊重したい。

これまでいく世代にも亘って尻別川で行われてきた生命の自然の営みを、決して無にしてはならない、と思うのだ。

オビラメの会ニューズレター創刊号（2000年７月）、第２号（同10月）、第３号（同11月）、第４号（2001年１月）に掲載。

有島ポンド採卵会

１万粒の人工授精に成功

オビラメの会は５月 12 日、ニセコ町有島記念公園内のイトウ飼育施設「有島ポンド」で人工採卵を試みました。作業に当たった会員約 15 人に加え、大勢の見学者が見守るなか、約１万粒の採卵と人工授精に成功しました。

ポンドの岸辺から特製の曳き網を引いて捕らえた親魚は計 44 尾。どのイトウも丸々と太り、雄は多くが真っ赤な婚姻色を呈しています。そばを流れる第２カシュンベツ川の流れの中の特設の生け簀に移してから、川村洋司さん、浪坂洋一さんら専門技術者の指導のもと、１尾ずつ麻酔をかけて身体測定し、触診で抱卵が確認されるたび、慎重に採卵を試みました。

大役を終えた親魚たちは、すぐに酸素たっぷりの流水中に移され、山根敏夫さん、大石剛司さん、藤盛聡さんのていねいな覚醒処置を受けて、元気にポンドに戻っていきました。

一方、ボウルの中で人工授精させた卵は、適量の真水とともにポリ袋に密封して保冷ボックスに納め、クルマでただちに地方独立行政法人北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場（恵庭市）に搬送しました。人工孵化槽で稚魚が誕生するのは夏ごろの見込み。秋まで同施設で飼育し、尻別川流域の再導入河川に放流する予定です。

オビラメ「見まもり」日誌2019

大石剛司　オビラメの会「見まもり隊」リーダー

オビラメの会は、尻別川水系に残された唯一のイトウ自然繁殖河川で、8年前から繁殖期の「見守り活動」を続けています。
横浜市在住の大石剛司会員は14年から、「見守り」シーズンに合わせてキャンピングカーを駆って北海道に。川の近くに長期滞在しながら、今季も遡上イトウたちの完全保護達成に大きく貢献しました。大石会員の手になる2019年シーズンの観察記録を掲載します。
月日に続くデータは、天気・気温・水温・川水の濁度について、早朝→正午ごろの現地での観測値。※は欠測。L記号は川岸に沿って12～15m間隔で設けたポイント番号。

4/24　晴れ→晴れ・7℃→ 20℃・4℃→ 7℃・小→中

05:39　右岸の笹の下20m♂1匹
06:10　右岸の笹の下10m♂1匹／バトル1回1匹は下流に、1匹は元の場所に
06:58　右岸の笹の下♂1匹
08:31　左岸の笹の下♂1匹／右岸の笹の下10m♂1匹

4/25　小雨→※・7℃→※℃・4℃→※℃・中→※

05:57　右岸の笹の下20mの左岸♂1匹
07:30　右岸の笹の下20mの左岸♂1匹
08:00-11:00　ハウス設置／看板設置（大3）／看板設置（小4大石がタコ糸で木に固定）／杭打ち／ロープ張り（左岸、右岸）

4/26　曇り→小雨・6℃→ 7℃・4℃→ 5℃・小→小

05:54　左岸の水門と右岸の水門の中間右岸♂1匹移動中
06:09　左岸の笹の下20m♂1匹
08:00　山根♂2匹
09:00　ハウスの下30m左岸♂1匹。右岸の笹の下10m♂1匹
11:10　左岸の笹の下♂1匹
16:20　左岸の笹の下10m♂1匹

4/27　小雪→※・4℃→※℃・4℃→※℃・小→※

06:05　左岸の笹の下10m♂1匹
06:25　左岸の笹の下20m♂1匹
07:40　右岸の笹の下20mの左岸♂1匹
08:02　左岸の笹の下10mの左岸♂1匹
08:05　右岸の笹の下20mの左岸♂1匹
12:30　L13-L14♂1匹／水門下♂1匹下流へ移動
15:30　♂3匹
16:25　L2♂1匹
16:35　L2♂1匹下流へ移動

4/28　晴れ→晴れ・2℃→ 16℃・3℃→ 8℃・無→小

05:50　L11-L12左岸♂1匹
05:55　L15♂1匹
08:10　未発見
10:00　L9右岸♂1匹
10:30　L11-L12♂1匹／L14-L15♂1匹
12:20　♂2匹
15:38　濁り大ハウスの下40m♂1匹下流へ移動

4/29　晴れ→晴れ・2℃→ 16℃・4℃→ 9℃・無→中

06:05　L17-L18左岸♂1匹移動中
06:20　L9-L10左岸♂1匹移動中
08:48　L11-L12左岸♂1匹
08:52　L21左岸♂1匹
08:57　L17-L18右岸♂1匹
14:35　L15左岸♂1匹

4/30　晴れ→晴れ・3℃→ 17℃・3℃→※℃・無→小

05:45　L17♂1匹移動中
05:54　右岸の水門下20m左岸♂1匹移動中
05:57　L17♂2匹移動中
06:11　L11右岸♂1匹／L13右岸♂1匹／L12-L13右岸♂1匹／L21左岸♂1匹
06:30　L13バトル
09:10　L16♂1匹／L18♂1匹
10:00　L14-L15右岸♂1匹／L19-L20右岸♂1匹
12:00　L17-L18右岸♂1匹
14:30　橋の下♂1匹
14:46　L11-L12左岸♂1匹
14:55　L11♂1匹♀1匹
17:00　L13右岸♂1匹

5/1　曇り→小雨・7℃→ 11℃・4℃→ 6℃・小→中

05:45　L5♂1匹
05:53　L7-L8♂2匹
06:03　L12♂1匹移動中
06:47　♂1匹堰堤の左岸を上流に上がった
06:57　L7-L8♂2匹
07:02　L18♂1匹移動中
07:11　橋の下流♂1匹
07:20　橋の上流♂1匹
07:25　L7-L8バトル
07:27　元の場所に戻る
07:43　L10-L11♂1匹♀1匹
08:03　L8右岸♂1匹♀1匹
10:00　ハウス上♂1匹♀1匹（多分）／L11-L12♂3匹
10:50　ハウス上♂1匹♀1匹（多分）／L12-L13♂3匹
16:00　L11-L12♂1匹

5/2　曇り→小雨・9℃→ 9℃・5℃→ 6℃・小→小

05:50　右岸の水門と合流点の中間♂1匹移動中
06:08　L8右岸♂1匹
06:09　L13右岸♂1匹
06:21　L5右岸♂1匹L8から上がってきた

06:23　L5左岸♂1匹上流から下がってきた
06:54　L5からL13へ
07:00　L16からL15へ移動後さらにL14へ
07:36　ハウス前でバトル。1匹は堰堤の下に、1匹はハウス前に
07:56　♂1匹堰堤の上へ
08:27　L8♂2匹♀1匹、●堀行動
08:30　L3♂1匹／L2♂1匹上流から下がってきた
09:25-09:30　L8♂1匹♀1匹、●産卵
09:42　L8上から♂1匹
11:10　L8♂4匹♀1匹、●堀行動
13:53　L0右岸♂1匹／L8左岸♂2匹
14:09　堰堤下♂2匹／L12-L13♂1匹／L8♂2匹
16:20　小雨濁り大

5/3　曇り→晴れ・7℃→15℃・4℃→7℃・小→小

06:06　右岸の水門と合流点の中間右岸♂1匹
06:16　L9左岸♂1匹／L10-L11左岸♂1匹
07:13　L2-L3右岸♂1匹
07:15　L7-L8左岸♂2匹
07:16　L8右岸♂1匹
07:19　L20左岸♂1匹
10:00　L0♂1匹
10:03　L4♂1匹
10:05　L8♂1匹
12:54　L0♀1匹
13:15　L5-L6右岸♂1匹／L8右岸♂1匹／L15-L16左岸♂1匹
14:17　／L19左岸♂1匹／L8右岸♂1匹

5/4　晴れ→※・4℃→※℃・4℃→※℃・中→※

05:45　左岸の水門と右岸の水門の中間左岸♂1匹
06:16　L11-L12左岸♂1匹／L13右岸♂1匹
06:26　♂1匹＋♂2匹（40m位移動しながらバトル）／L21♂2匹／L16♂1匹
07:41　L8♀1匹
08:50　L5♂1匹
09:10　L8♂1匹
11:20　L8♀1匹／L7-L8♂
14:14-14:40　L8♂1匹♀1匹●産卵

5/5　※→晴れ・※℃→※℃・※℃→※℃・※→中

06:00　L20♂1匹下流へ
07:00　L14♂1匹
09:10　L8右岸♂1匹♀1匹●産卵
10:55　L2右岸♂1匹
10:58　L8-L9♂1匹♀1匹●堀行動1回
11:24　L8♂1匹と♀1匹が上流に移動
11:30　L7の♂1匹が上流へ♂1匹♀1匹
11:35　L7-L8♂1匹 L5♂1匹♀１匹
11:55　L4-L5♀1匹♂1匹は下流へ
12:13　L3♂1匹♀1匹
15:52　L0♂2匹（1匹は1m20cm位）♀1匹
17:45　L1右岸♂2匹バトル／L1♀1匹が加わる
17:54　♀1匹が移動

5/6　曇り→曇り・4℃→19℃・5℃→8℃・小→小

05:20　L0左岸♂1匹
05:41　合流点♂1匹
05:46　合流点♀1匹が川に入っていくのを確認／♀の後を♂1匹が付いていくのを確認
06:00　L17左岸♂1匹
06:55　L13右岸♂1匹
06:59　L21+右岸♂1匹♀1匹
07:06　L21+バトル
07:06-07:41　♂1匹♀1匹●堀行動9回
07:41　L21+♂1匹♀1匹♂と♀が上流に移動
08:28　L12からL11に♂1匹♀1匹が移動してきた
08:35　L9-L10♂1匹♀1匹
09:15　L17-L18♂1匹♀1匹（上流にいた♀）／L18♂1匹
09:30　♀を見失う
09:40　L3♂1匹／橋の上流♂1匹
10:56　L0右岸♂1匹、左岸♂1匹／L1♂1匹／L7-L8♂1匹♀1匹
11:05　♂1匹堰堤上へ
11:10　♂1匹堰堤上へ／♂1匹堰堤下へ／♂1匹堰堤上へ
11:36　♂1匹橋の上流へ
11:55　L8♂1匹♀1匹●産卵
13:27　L1♂1匹／L2♂1匹
13:30　L9♂1匹

13:32　L12♂1匹
13:44　L8♂1匹♀1匹●堀行動22回
13:46　バトルで♂が入れ替わる
14;53　L8♂1匹♀1匹●産卵
16:19　L0右岸♂1匹／
16:54　L8♂2匹(仲が良い♂で寄り添っている)／L11♂1匹
17:15　L8バトル／L8♂1匹♀1匹
17:28　L8バトル2回
17:32-18:38　●堀行動12回／夕方から夜は大雨

5/7　曇り→晴れ・6℃→ 13℃・4℃→ 8℃・大→中

06:00　L11-L12右岸♂1匹
06:15　L8-L9右岸♂1匹
07:20　L13右岸♂1匹／L11-L12♂1匹／L8-L9♂1匹
10:24　L8左岸♂1匹／L8右岸♂1匹♀1匹
10:26　L11-L12左岸♂1匹
10:38　L8♀が流心へ移動
10:41　L8バトル
10:46　L8バトル
11:01　L8♀が下流へ移動
14:08　／L11-L12左岸♂1匹／L0左岸♂1匹
16:13　L11-L12右岸♂1匹

5/8　雨→晴れ・7℃→※℃・4℃→ 8℃・小→小

06:00　左岸の水門と右岸の水門の中間右岸♂1匹
06:23　L8右岸♂1匹
06:27　L15左岸♂1匹
06:29　L18-L19右岸♂1匹
06:32　L13右岸♂1匹
06:37　L8-L9右岸♂2匹
07:55　L13右岸♂1匹
08:14　L15左岸♂1匹
08:16　L21+左岸♂1匹(大きい)
09:36　L1♂1匹
09:39-11:05　L8♂1匹♀1匹●堀行動52回
12:20　♂5匹♀1匹
13:14　L4♂1匹
13:17　L8♂1匹
13:19　L12♂1匹
16:39　L3♂1匹
17:14　L0♂1匹
17:40　L3右岸♂1匹
17:44-18:52　L8右岸♂2匹♀1匹／●堀行動21回。途中でバトル3回

5/9　※→晴れ・※℃→ 17℃・※℃→ 9℃・※→小

05:35　L5右岸♂1匹
05:50　L21右岸♂1匹
06:02　L1♂1匹／L1-L2♂1匹
06:07　L8右岸♂1匹♀1匹
07:18　橋の上流♂1匹
07:20　L0右岸♂1匹
07:24　L8右岸♂1匹♀1匹
07:26　L13右岸♂1匹
07:27　L13-L14右岸♂1匹
07:36　L8右岸♂1匹♀1匹
07:40　L8バトル
07:46　L8バトル
08:01　L7-L8♂1匹♀1匹。♀のみ上流へ
11:00-11:56　L8♂1匹♀1匹
11:39　●産卵●堀行動35回●カバーリング行動10回
13:26　L1中央♂1匹
13:28　右岸♀1匹
13:30　L7-L8左岸♂1匹
13:39　L8右岸♂1匹♀1匹
13:50　L20-L21左岸♂2匹 L21+♂1匹♀1匹
14:10　L21+♂が下流へ移動、♀は不明
14:56-15:57　L21+♂1匹♀1匹
15:03　上流の♂が下りてきて、入れ替わる
15:12　♂のバトルで2匹がL21へ移動、仲良しの2匹／その間に、元の♂が下流から移動してきて、入れ替わる
15:43　●産卵●堀行動20回●カバーリング行動5回
17:23　L0右岸♂1匹
17:40　L21+右岸♂1匹

5/10　曇り→曇り・7℃→ 9℃・5℃→ 7℃・無→無

05:30　L0右岸♂1匹
05:50　右岸の水門の下20m♂1匹／右岸の水門の下25m♂1匹
06:05　L8右岸♂1匹

07:30　L0右岸♂1匹
07:41　L1左岸♂1匹
09:30　L0左岸♂1匹
09:44　L9右岸♂1匹
12:10　寒い！
12:33　L11-L12左岸♂1匹
14:41　L8右岸♂1匹
15:00　左岸で山菜取り
17:04　L8左岸♂1匹

5/11　曇り→※・6℃→※℃・5℃→※℃・無→※

06:12　合流点から川に入って10m左岸♂1匹
06:30　L8右岸♂1匹
08:00　L8♂1匹
12:26　L1右岸♂2匹／L8♂2匹
16:00　未発見

5/12　晴れ→晴れ・6℃→ 17℃・4℃→ 9℃・無→小

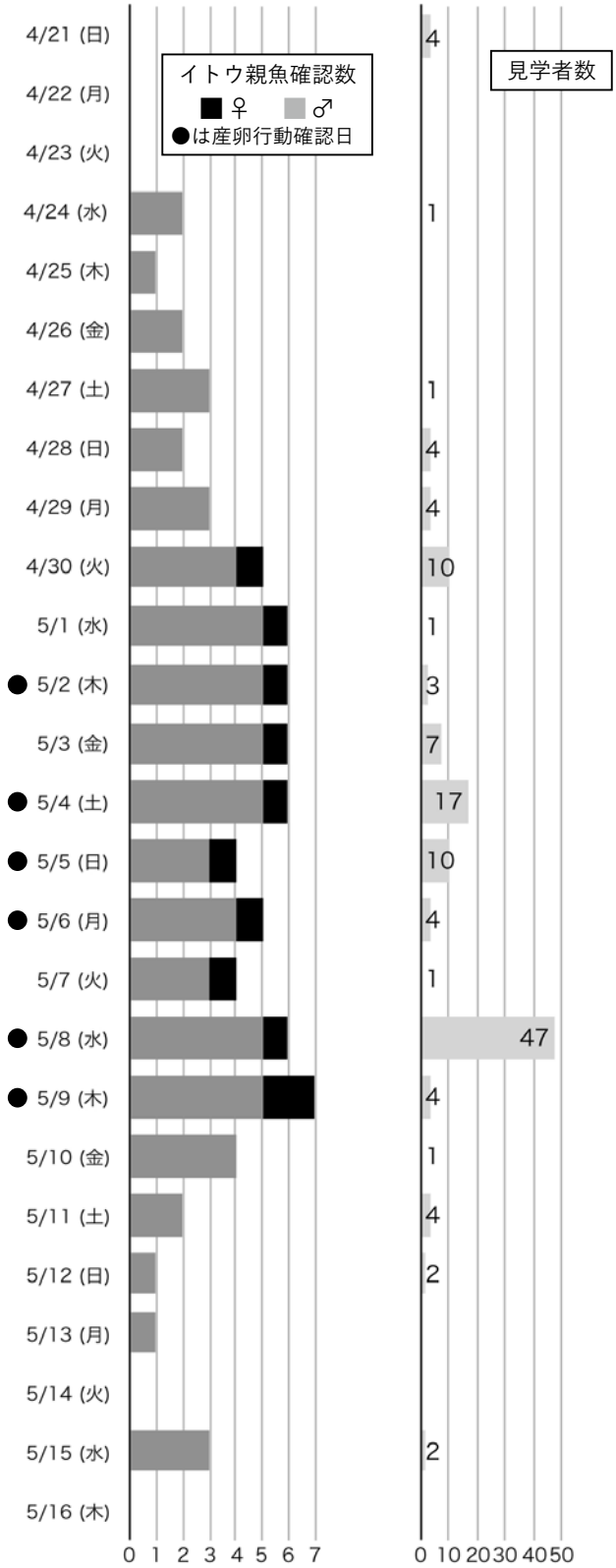
06:30　未発見
07:30　L8右岸♂1匹
15:13　L8右岸♂1匹
17:58　L8右岸♂1匹

5/13　晴れ→晴れ・4℃→ 20℃・4℃→ 11℃・無→無

06:36　L8右岸♂1匹
08:55　L17-l18右岸♂1匹
11:04　L17-L18右岸♂1匹
17:30　濁り中

5 月 16 日（木）

06:00-11:00　撤収作業:川村、大石／小看板4個の撤去→ハウス内に収納／両岸の杭の撤去、ロープの撤去→ハウス内に収納／ストーブ･灯油タンク川村が預かる



見まもり期間 4 月 21 日～5月 18 日（28 日間）
出動隊員数　のべ 160 人・日
見学者数　　のべ 127 人・日

おつかれさまでした！

ぼくら、イトウのレスキュー隊

報告会@倶知安町でのパネルディスカションから

オビラメの会は５月26日、「イトウ繁殖地見まもり隊報告会／ぼくら、イトウのレスキュー隊」（倶知安町文化福祉センター）を倶知安町と共催しました。後志地域生物多様性協議会後援。パネルディスカッションのようすをダイジェストでお伝えします。

写真撮影・足立聡（オビラメの会）

フロア（木村聖子・倶知安町議会議員） 私も釣り人の一人です。尻別川でイトウを釣ったことはありませんけれど、本当に貴重な存在だと認識しています。倶知安町を中心に、イトウのための活動をお手伝いできればと思います。大石さんのご指摘だったでしょうか、「流域の農家さんのご理解が必要」というお話でしたが、具体的にどんな懸念があるのか、教えていただけますか。また釣り人に対してルール整備のお話も出ました。どんな形のものが考えられるでしょうか。

藤原弘昭さん 再導入などの活動の成果が表れて、（いままでイトウの姿のなかった支流などで）「そこにイトウがいる」という情報が広がると、そのイトウを狙って、釣り人が入り込んでくると思われます。それが近隣農家さんの作業の邪魔になったり、自動車を畑の入り口に駐めてしまったり……。そういったトラブルはどこの釣り場でもありますよね。実際、われわれが稚魚を放流した支流でも、特に夏の渇水期にはごく小さな流れになるにもかかわらず、「立派な釣り竿を持った人が入り込んできた」という話を、流域の農家さんから聞いたことがあります。ここでどんな復元活動が行なわれているのか、とか、ここに車を駐めたら川のそばの農家さんの生活を邪魔してしまうんじゃないか、とか、そういうことを学ばないまま、ただイトウを釣りたい一心でやってくる釣り人に対しては、釣り雑誌とかSNSとかを使って啓蒙したりすることも必要かな、と思います。そうしたマナーに加えて、実際にイトウが釣れた場合のテクニックも大事だと思います。キャッチ＆リリースの100％達成は無理かも知れませんが、尻別川でも何らかのルールを設定して、みなさんに理解して守ってもらえたらと思います。

川村洋司さん 農業サイドとの関係についてですが……。今回、ひとつ問題が起きました。一昨年の水害発生を受けて、私たちのイトウ再導入実験河川の河畔林が、「災害復旧工事」の名目で、すっかり伐採されてしまったのです。障害物（河畔林）を切って洪水時の流れを良くすることが、川のそばの農業者には「ぜひやってもらいたい治水工事」だということは理解できます。しかしわれわれの立場から見ると、河畔林がなくなってしまうとイトウの生息環境は非常に悪化してしまいます。このように、われわれと農業サイドとで利害が一致しない場合は多々あり、これからもそういうことは頻繁に出てくるかな、と思うのですが、とにかく関係を良好に保つような努力をこちらからやっていかないと、この問題はクリアできないと思っています。

フロア（沼田昭宏・倶知安町住民環境課長） 行政がどれだけ有効なイトウ保全策をとれるのか、企画担当の時代から、いろいろな関係者に集まってもらって、知恵を出し合う会議を開いたこともありました。「次の一手」をどう打っていっ

たらいいのか、またそれをやった先のストーリーと言うんでしょうか、そこまで考えていかなければならないと思っています。（繁殖期間の）イトウ捕獲禁止は、現在の法律体系の中ではなかなか難しいということはよく分かっていますが、そんな中で、先ほど触れられた「町によるイトウ繁殖地の天然記念物指定」は、なかなかおもしろい観点だと思います。役所的には所管が変わって社会教育マターになりますので、役所の中でも連携を図りながら、それができるのかどうかを含めて研究しなければ、と思いました。またその時には、オビラメの会さんがこれまで蓄積されたデータが生きてくると思います。

フロア（梅田滋さん）　自分の住んでいる喜茂別町内の尻別川で何かできないだろうか、とずっと考えています。30年計画の第3段階に入ると、尻別川流域の各地区で繁殖地の復元に取り組むことになっています。喜茂別は尻別川流域でいえば上流部にあたる地域ですが、町内には「かつてイトウ釣りをやっていた」という人がかなりいらっしゃいます。なので「最近はイトウが釣れない」というのは町民もよく知っているのですが、「復活させたい」とまではなかなか……。倶知安町役場の沼田さんがいま、行政内部での連携の可能性をおっしゃっていましたが、尻別川統一条例もありますし、喜茂別であれどこであれ、ぜひ倶知安町に（先頭を切って）示唆してもらいたいなあ、と思います。ちょっと明るい動きをお話ししますと、私は喜茂別の地域の歴史を学ぶグループの事務局をやっていますが、そのメンバーから「イトウに関心がある」「オビラメの会の話を聞きたい」という声が聞こえてきています。これが地元での議論のきっかけになるかも知れません。

川村洋司さん　いま、4月から5月にかけて、倶知安町内の繁殖河川では、非常に巨大で、なおかつ真っ赤な色をしたイトウを見ることができます。その姿を見た人はだいたい感動します。とにかく、見ると見ないとでは印象が全く違う。これだけ個体数が減って、実際に尻別川のイトウを見たことのある人は多くないと思います。有島記念公園の池で展示しているイトウでもいいです。ぜひイトウを見てほしい。かつてそうだったように、イトウを身近な存在として感じ取って欲しい。その手助けのために、われわれもいろんなところに話に行きたいと思います。住民の方の側から提案いただけると、とてもうれしいです。

ぜひイトウを見てほしい。かつてそうだったように、イトウを身近な存在として感じ取って欲しい。
――川村洋司さん

司会　尻別川全体でイトウ個体群を復元する、という目標だと思いますが、するとダムで区切られたパートパートで再導入を行なうことになりますか？

川村洋司さん　確かに尻別川にはそういった制約があり、それを踏まえて復元を進めざるを得ません。ダムがあると、魚類は下流から上流にはなかなか上がれないかも知れませんが、上流から下流には通過できる可能性があるので、どちらかというと上流部を中心に再生産河川を設定する形になると思います。より長期的には「イトウ個体群復元のためにダムをどうする？」という話になっていくと思いますが、現状では、まだそこまで具体的に考えられていません。

フロア（大井秀則さん）　尻別川ではラフティングが盛んです。イトウの生息に影響はないでしょうか。またニセコ町などの尻別川では、放流ニジマスを使った釣り教室が開かれているようです。これもイトウに影響があるのではないでしょうか。

川村洋司さん　ラフティングは地元に大きな経済効果をもたらしているようですが、釣り人には評判が良くないですね（笑）。イトウ資源に対する影響はどうかというと、正直なところ、データはありません。イトウの産卵場所は（ラフティングコースから離れた）支流域ですし、稚魚期の生態も独特なので、その時期にラフティングの影響を受けているとは考えられません。本流に生息するイトウにとって、あまり頻繁にボートが行ったり来たりすると、餌を取る機会が減るとか、そういうことがないとは言えないかも知れ

ませんが、資源そのものに大きな影響はないと思います。外来ニジマスの影響については、南富良野町・空知川の生息地で私が観察したケースでは、イトウ繁殖地に15cm前後のニジマスがちょろちょろ寄ってきていたので、イトウの卵が食害されている可能性は考えられました。産卵期が互いに近いということは、浮上（孵化稚魚の産卵床からの泳ぎだし）時期もほぼ重なっているわけです。イトウに比べてニジマスの成長スピードははるかに早く、先に大型化するニジマス幼魚がイトウ幼魚を食べてしまうことは考えられますし、生息域の侵害もあるでしょう。ただ、では尻別川のイトウ繁殖地はどうかというと、今のところ、そこまでニジマスの影響が目立つことはないようです。

司会　活発なご議論をありがとうございました。最後にパネリストのみなさん、ひとことずつお願いします。

大石剛司さん　私の見守り隊参加は、今年で6年目でした。まだまだ元気なつもりでいますので、来年以降もイトウを見守っていきたいと思います。どうもありがとうございました。

山根敏夫さん　再導入河川に観察に行くと、どうしても川のそばの畑の道路を通らなければならないし、畑のそばに車を駐めることになります。私以外にも、イトウを釣る目的で来る人がいて、中には農家さんに迷惑をかけてしまう人もいるでしょうし、おかげで（川にやってくる人全員に対する）印象が悪くなってしまうこともありえるでしょう。でも、私はこのことを「良い方向」に変えていきたいと思っています。川にイトウを見に来たり、釣りに来たりするついでに、倶知安産の農産物を買って帰ったりすれば、イトウに対する農家の印象も変わってくるんじゃないかな、と思います。私たちがイトウを放流したことで、「川に人が集まるようになって迷惑だ」と受け取るのではなく、「イトウのおかげで良いことが増えた」となってほしいですし、そうすれば、また別の流域に再導入を図る時に歓迎してもらえて、私たちの活動はもっとうまくいくと思います。今はまだそういう状況ではないかも知れませんが、将来的にそういう地域に変えていくのが私たちの役割、使命だと思うし、それができない限り、イトウ繁殖地を流域全体に広げていくなんて無理だと思います。とにかくそういう方向にいくように、私も努力しますし、協力してくれる方々を増やしていきたいと思っています。

藤原弘昭さん　農家さんに喜ばれるように、イトウを育む川の横でつくったジャガイモに「オビラメいも」とか名付けてブランド化するとか（笑）。ラフティングとかニジマス釣りとかのお話も出ましたが、流域のみなさんと、僕らの思惑とで食い違いが出てくる場面はあると思うんですね。釣り人からすれば、尻別川では今はイトウの数が少なすぎて釣りの対象魚になりえていませんから、ニジマスだってすごく魅力的な魚です。そのようなそれぞれの立場を壊さない形でイトウを増やしていけたらなあ、というのが僕の目標です。

川村洋司さん　先日亡くなられた草島清作会長が、「私の目の黒いうちにイトウを復活させたい」とよくおっしゃっていました。残念ながらその希望を十分にかなえてさしあげることができませんでしたが、今度は私自身が「目の黒いうちにぜひ尻別川のイトウを復活させる」と唱えていきたいと思います。山根さんをはじめ若い方たちも積極的にオビラメの会の活動を支えてくださっています。みなさんもぜひご協力をお願いします。ありがとうございました。

大きなイトウが群れ泳ぐ尻別川の実現を

吉岡俊彦　オビラメの会副会長

オビラメの会の吉岡でございます。お忙しい中、イトウ見まもり活動報告会にお集まりいただき、まことにありがとうございました。この見まもり活動も9年目に入り、本年も自然産卵床、産卵河川、また再導入河川に多数のイトウが遡上し、無事、産卵が行なわれました。オビラメの会の掲げる、尻別川イトウ復活30年計画も残すところ11年になりました。故・草島会長が生前望んでいた、1ｍもあるような大きなイトウが群れ泳ぐ尻別川の実現に向かって、これからも会員ともども、活動を続けてまいりたいと思います。今後ともみなさまがたのご支援とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。本日はどうもありがとうございました。

再導入河川で産卵行動が確認されたイトウたち

モニタリング期間：2019年4月29日～5月10日　観察者：山根敏夫、藤原弘昭、足立聡

確認日	♂（標識部位）	♀（標識部位）	メモ
4月29日	80cm（アブラビレ）	80cm（アブラビレ、左ハラビレ）	
	60cm（無標識？）	70～80?cm（未確認）	
5月2日	70cm（アブラビレ、左ハラビレ）	65cm（アブラビレ、左ハラビレ）	
5月3日	70cm（アブラビレ）	70cm（アブラビレ）	
	65cm（無標識）	75cm（アブラビレ）	
5月4日	85cm（アブラビレ）	80cm（アブラビレ）	
	70cm（未確認）	70cm（未確認）	
5月5日	**70cm（無標識）**	70cm（アブラビレ）	
	65cm（無標識）	75cm（アブラビレ）	
5月6日	85cm（アブラビレ）	65cm（アブラビレ）	
	75cm（アブラビレ）、85cm（アブラビレ、右ハラビレ）	**70cm（無標識）**	雄同士2尾のバトルの末、雄85cmが雌70cmとペアに

体サイズは水上からの目視観測や撮影画像からの推定値。標識（ヒレの切除）は水上・水中撮影により確認しました。

再導入河川を安定した「尻別イトウの母川」にしよう

藤原弘昭　オビラメの会

僕はイトウ釣りが大好きで、ふだんはイトウをいじめてますが（笑）、釣り師にとってあこがれの尻別川で「イトウがもうほとんどいないぞ」と聞き、オビラメの会に参加するようになりました。

われわれがイトウ稚魚を放流した川で、初めて親魚の遡上とペアリング、自然産卵が確認されたのは 2012 年 5 月 11 日です。この時のペアは、雄が 2005 年春放流、雌が 2004 年秋放流の個体でした。

2014 ～ 16 年、僕はたまたま、すぐそばの後志総合振興局勤務だったものですから、この間はほぼ毎朝、仕事前に川に観察に行っていました。15 年は 2 ペアを確認し、16 年は 3 日間にわたってペアを確認しました。18 年は 5 月 4 日に 1 ペアが産卵、6 日に 2 ペアが産卵しています。

今年は 4 月 29 日から 5 月 6 日か、もう少し後まで繁殖行動が見られたようです。春先に暖かい日が続いてイトウも繁殖のスイッチが入りかけたと思いますが、4 月末に急に気温が下がって一時休止し、再び水温が上昇してきたところでダダダダっと一気に産卵した、という印象を受けました。

今年は待望の「再導入第 2 世代野生イトウ」が確認されました。われわれが放流した稚魚が自力で成長して卵を産み、その卵から生まれた子どもがまた親になって戻ってきた証拠です。イトウ保護活動を続けているわれわれには、非常に喜ばしいことなのです。

この川が尻別イトウにとって安定した「母川」になるように、今後とも活動していきたいですし、流域の農家さんの理解や、行政の協力も求めていきたいと思います。

2019年5月26日「イトウ繁殖地見まもり隊報告会」での発表から。

オビラメの会2019通常総会

【日時】　2019年7月6日（土曜）午後2時

【会場】　ニセコ町民センター（ニセコ町字富士見95）

【年会費】2000円

2018年度通常総会の様子

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

当会は、会費と寄付金などで運営される非営利の市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、「入会希望」と書き添えて、右のゆうちょ銀行口座にお振り込み下さい（手数料はご負担願います）。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末（5月）までです。おおむねひと月以内にニューズレターをお届けします。

■年会費2000円
■ゆうちょ銀行
02720-9-11016
■加入者名「オビラメの会」

会員のみなさまへ

2019年度の年会費納時期を迎えています。同封の振込用紙をご利用ください。

WANTED

標識オビラメ見つけたら
☎ 090-8279-8605
オビラメ事務局マデ

ご支援をありがとうございます

当会は2016年度から、「**1% for The Planet**」運動に賛同する**株式会社アトリエ・モリヒコ**の支援を受けています。当会の「絶滅危惧種イトウ（サケ科）北海道尻別川個体群の復元活動」は、**公益社団法人日本ユネスコ協会連盟**による『**プロジェクト未来遺産2015**』に登録されています。当会は2017年度、北海道知事から**第1回「未来へつなぐ！北国のいきもの守りたい賞**」を受賞しました。みなさまのご支援に深く御礼を申し上げます。
絶滅危惧種イトウ尻別川個体群復元に向けて、引き続きご協力いただきますよう、お願い申し上げます。

オビラメの会ニューズレター 第50号（2019年6月発行）
OBIRAME Newsletter No.50 June 2019
■発　行■ 尻別川の未来を考えるオビラメの会
副会長／吉岡俊彦　事務局長／川村洋司
■編　集■ 平田剛士
■印　刷■ (株)須田製版（北海道滝川市栄町3-5-16）
■口　座■ ゆうちょ銀行 02720-9-11016　オビラメの会
■事務局■ 北海道虻田郡ニセコ町ニセコ315-198（川村方）
〒048-1511 TEL 090-8279-8605
http://obirame.sakura.ne.jp/index.html
©2019 Obirame Restoration Group

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見65　TEL/FAX 0136-44-2472
Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp